

物語りの贈りもの 5

長い航海

庄野英二



角川書店

航海

庄野英二



角川書店



長い航海

昭和53年12月15日 初版発行

著 者 庄野英二

発行者 角川春樹

発行所 株式会社^{かどかわしよてん}角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3 郵便番号 102
電話（東京）（265）7111〈大代表〉 振替 東京3-195208

東洋印刷・宮田製本

©Printed in Japan

0093-872236-0946(0)

長い航海

夜が明けると、筏いかだの上にいるのは二人きりであった。
あたりの海にはごみ一つ浮いていなかった。

「みんなどこへいったんだろう」

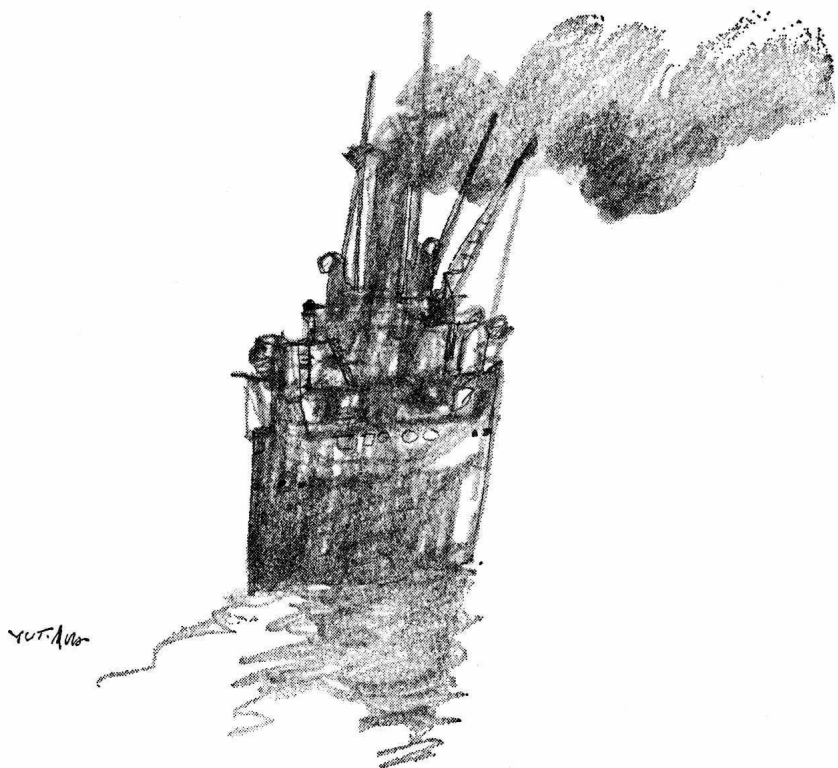
一人の兵隊がいった。

「みんな沈んでしまったってわけでもあるまいし」

もう一人の兵隊がいった。

二人の兵隊はまた黙りこんで海をながめていた。三六〇度どちらを向いても海だけであつた。

やがて、水平線の一か所がミカン色に燃えだしたかと思うと、あたりの空がバラ色ににじみはじめた。積乱雲が浮かんでいる。積乱雲が金粉をふきつけたように輝きだした。そして、水平線に朝日がのぼりはじめた。



二人の長い航海のはじまりであった。

昭和十九年十二月。日本軍部隊を満載した一隻の輸送船がソロモン群島に向かってモルッカ海峡を航行していた。そのあたりは、制空権も制海権も連合軍の手にあって航海はきわめて危険であった。無事に航海できたとしたならば、むしろ奇跡といってもいいほどの海域であった。

輸送船は、そのようなことは百も承知でソロモン群島に向かっていった。輸送船には一隻の駆逐艦くしゆかんが護衛についているはずであったが、護衛艦の姿はいつの間にか見えなくなってしまうていた。

当時、ソロモン群島にいる日本軍は、優勢な敵上陸部隊の攻撃を受けて、全滅寸前の状況にあった。兵器弾薬はもとより、食料もつきてしまつてすでに飢餓状態きがにあった。たとえ敵が攻撃の手をゆるめたとしても餓死しなければならぬ運命にあった。

輸送船は運を天にまかせていた。

奇跡は起こらなかった。

十二月十五日夕刻、輸送船はアメリカ空軍の爆弾攻撃を受けてたちまち沈没してしまった。

浮きあがってきた兵隊たちに敵機はくり返し、くり返し機銃掃射を加えて去っていった。あたりの海面には、船に積んであった船材、器材その他あらゆるがらくたが浮かびあがっていた。よくもこれだけのものが船にのっていたものだと感心しないではいられなかった。そして海面にはどす黒く重油が流れだしていた。

生き残った連中は、空箱や、材木にしがみついて浮かんでいた。顔は重油のためまっ黒になつてしまつていた。誰が誰やら見分けがつかなかった。

やがて夕やみがせまつてきた。そして暗い夜になった。

二人の兵隊、くねしゆうへい おきうらとめきち櫟修平と沖浦留吉は目の前に流れてきた大きな救命筏にすがりついていた。筏の四周のロープにはほかにも多くの兵隊たちがかじりついていた。

二人はたすけあつて、その上によじのぼつた。二人が手足を大の字にひろげて寝ても、まだまだゆつたりしていた。いや、もう十人でも、二十人でも乗れそうであつたが誰もよじのぼつてこなかった。

先ほどまで、あちらこちらの海面で、軍歌を歌つて勇気づけあつてゐる兵隊の声も聞こえていたが、それも聞こえなくなつてしまつていた。

「俺は晩第一〇〇七部隊の櫟という上等兵だ」

櫟があいさつをすると、

「俺は同じ部隊の沖浦という一等兵です。よろしくたのみます」

「よろしくつてたのまれても、なんにもしてやれねえが、俺もよろしくたのむよ」

と櫟がたよりのない返事をした。

「ゆうべ筏にかじりついてた連中が全然いないじゃないですか、流されてしまったのか。それに、ごみ一つ浮かんでいないよな、きれいな海だ、重油も流れていねえ」

沖浦がいった。

「潮の流れが速いんだな」

櫟がいった。

二人はもうちょっとくわしく自己紹介をした。

「俺は仏師だった。仏さんを作る仕事だ。生まれは能登の田舎、十五の年に金沢に出て仏師の家に住みこんで見習いをした。おふくろとかあちゃんと今年十歳になる女の子がいる。

俺は召集されて四年になる。三十五歳だ。俺は上等兵だが、こんな海の上では階級なんか抜きでいかしてくれ、櫟、修平、修なんでもいい、呼びつけてくれ」

「俺は漁師だ。五島の生まれ、長崎から海の向かい側の五島の海で魚をとっていた。福江って町の近くだ。階級抜きで心安くさしてもらうよ。俺には沖浦でも、留吉でも留とでも呼んでくれ、内地では留とか留さんと呼ばれていた」

自己紹介が終ると二人とも黙って海や朝日をながめていた。

しばらくすると、どちらともなくゲラゲラと笑いだした。その笑い声はしだいに大きくなっていった。いくら笑っても笑いがとまらなかった。

十分ほどたつてやっと笑いがおさまった。それでも、また時々おかしくなってきた。

二人がなぜ、そんなに笑ったのか、二人とも説明の必要はなかった。

二人は召集されてから、昨夕船が沈没するまで、どんなに辛く苦しく悲しい目をしてきたかしれなかった。軍隊の仕事はきびしくきつかった。いや、それぐらいのことは、二人にはこらえられないほどの苦痛ではなかった。それよりも耐えられないのは、人間が人間扱いされないことであつた。上官が下級の者にいばったりどなったりするのは当然と考えられ古兵と新兵の間にも戦友愛どころか、たえず陰險な仕打ちがたくらまれ陰湿な空気がよどんでいた。その状態は、日に日に死地に近づいていきながらも変化することはなかった。

二人は久しぶりに自由の世界を楽しむことができた。もう上官もいなければどなったりな

ぐったりする古兵もない。戦争は遠い世界のできごとであった。

午後、スコールがやってきた。

せつかくのスコールであったが、それを受けるバケツも桶かじもなかった。二人はスコールが降っている間、上を向いて口をあけていた。

スコールは三十分ほど通り過ぎていった。口の中をしめした程度で、いくらかのどの乾きをいやしてくれたものの腹のたしにはならなかった。

腹のたしといえは、櫓も沖浦も今朝以来その名前を口にだすことをつつしんでいた。二人はまるで同じことを考えていたのであった。

その名前というのは、二人がただ一つ携えている食料、一本のカツオ節のことであった。

マニラで輸送船に乗った時、非常用食料として一人に一本ずつのカツオ節が支給せられた。そして上官からきびしい注意があった。

「このカツオ節は船内で絶対にかじってはならない。かじった者は嚴罰だ。このカツオ節はお前たちの生命を守ってくれる唯一の食料である。船が遭難しても、このカツオ節と水さえあれば生命を一か月以上持ちこたえることができるのだ。各人ひもでしっかり身体からだにしばらくつけておけ。夜寝る時も身体からはずしてはならんのだ」

櫟も沖浦も上官の注意どおりにカツオ節を身体にゆわえつけておいた。そのおかげで昨夕の沈没の時にも落とさないで助かった。櫟も沖浦も、今朝から何回となくカツオ節を握りしめた。かたい手応えに励まされるような気がした。カツオ節と水さえあれば一か月以上は生きのびる。そのうちに救助船がきてひろいあげてくれるか、どこかの島にたどりつくかもしれない。

その日は二人ともカツオ節の名を口にしなかった。ちょっとでも食いのばさなければならぬ。もう耐えられない飢餓状態になるまでは一口もかじらないつもりであった。

櫟も沖浦もまるでカツオ節が身体にゆわえつけてあるのを忘れたような顔をしていた。

その翌日も午後になってスコールがやってきた。二人は天を向いて口をあけていたが、またも三十分ほどで通り過ぎていった。なんとか水を溜める方法があればと思った。しかし筏の上には何の道具もなかった。その日も二人ともカツオ節のことを口にしないで辛抱していた。早くいいだしたほうが敗けだと思った。敗けた者が飢え死にし、最後まで忍耐したもの生きのびるのだ。二人とも同じようなことを心の中で考えていた。

ありがたいことに毎日スコールが降ってくれた。しかしこのスコールだって今後とも毎日降ってくれるものとは約束されていなかった。文字どおり空頼みにすぎない。南方の国々で

は乾期と雨期と分かれていることを聞いていた。乾期はカラカラの天気続きで草も枯れるほどだという。洋上にもやはり乾期があるのではなからうか。もしも何日もスコールが降らなければ、筏の上で干ぼしのカエルのようになってしまわなければならないのであった。

バケツも桶もなかったが、三日四日とたうちに少しは知恵も働くようになった。

初めは天を向いて口をあけているだけであつたのが、次には濡れた服をしぼって、したたり出てくる水を飲むことを思いついた。その次には、シャツやズボンをぬいでそれに水を受けることにした。シャツやズボンを水のたまりやすい形にくぼませておいて雨水を受けるのであった。しかし布地を通して水はあっさりと逃げてしまった。次にはシャツとズボンを重ねて器を作った。その次には二人分のシャツとズボンを重ねてみた。

一人にコップ二杯分ぐらいの水を飲むことができるようになった。それでも腹のたしになつた。

漂流五日目の朝がきた。

やっぱり水平線しか見えなかった。水平線の上に、綿菓子のような積乱雲が湧きあがっているだけであつた。

その日も午後になってスコールがやってきた。二人はコップ二杯分ぐらいの雨水を飲んだ。

水を飲んだ後で二人は顔を見合わせた。その瞬間二人はニヤリと頬をゆるめた。そしてものもいわないでうなずきあった。

二人はゆわえつけてあったカツオ節を初めてかじることにした。もう今日ぐらいから食べなければと二人は同じことを心の中で考えていたのであった。

カツオ節は堅くて歯がたたなかった。堅くて歯がたたないことが幸せであった。もしもカツオ節が柔らかかったならば、あつという間にすっかり胃袋の中へいれてしまっていたのにちがいがなかった。

二人は日が暮れるまでカツオ節をしゃぶり続けていた。そして柔らかくなったところをかじって何回も何回もかんで味わったうえでのどから胃袋に送りこんだ。

食べたカツオ節の容積は、角ザトウ一個分ぐらいであったのだが、身体じゅうに急に力がいみなぎってきたような感じがしてきた。

その晩は二人とも心がうきうきしていた。

沖浦は鼻歌のような調子でふるさとの歌を歌った。

沖浦の歌が終ると、櫂がぼそとした感じで、

「荒海や佐渡に横たふ天の川」

といった。

沖浦は、

「修さん、それ何のことじゃ」

と尋ねた。

「これは芭蕉の俳句だ。荒海や佐渡に横たふ天の川」

と櫓がこたえた。そして続いてぼそぼそ語りだした。

「佐渡に横たふ……四十九里、波の上にある佐渡にかけて流れている天の川、俺はこの俳句を知った時から雄大な情景だと感心していた。さすがは芭蕉先生だと感心していた。ところがこう毎晩波の上で顔のまうえの天の川をながめていると、佐渡に横たふどころのけちなもんじゃないよ。水平線から水平線にかけて天の川が流れているじゃないか」

「そうよなあ、太平洋の空一ぱいじゃ」

沖浦が相槌あづちを打った。そして、

「修さん、俳句など勉強しとったのか」

と尋ねた。

「勉強しとったちゅうわけでもないが、近所の寺の坊さんがさ、とても俳句にこっていて、

檀家の仏壇へおまいりにいってもいつも俳句の話ばかり、お経をあげている時間より俳句の講釈のほうが長かった。うちも檀家だったのでよく聞かされた。そのかわり俺の作った仏さまはいつもその坊さんにお経をあげて魂を入れてもらっていたんだ。俺は毎晩天の川をながめるたびにこの俳句を教えてくれた坊さんのことを思っていた」

「こんなに空一ぱいに星が煙ると明るすぎて寝られたものじゃない」
と沖浦はこぼした。

漂流三週間目の未明、二人は目を覚ましていた。まだあたりの海も空も暗かった。まだ朝日ののぼりだす気配はなかった。

二人は夢を見て目を覚ましたのであった。

櫟は海上に立っている観音像を発見したのであった。そして思わず伏し拝んだ。そのひょうしに目が覚めた。

沖浦は、トビウオが筏の上にとんできてそれをつかまえたひょうしに目を覚ました。

「惜しいことをした。たしかにつかんだ」

沖浦がいった。

「何のことだ」

櫟が尋ねた。

沖浦は夢でトビウオをつかまえた話をした。